〈共同研究報告〉

# 創刊期『太陽』論説欄をめぐって

鈴木貞美

## 1。『太陽』の創刊――「公器」としての総合雑誌

『太陽』は明治二十八（一八九五）年一月号をもって創刊、昭和三（一九二八）年二月号まで約三十三年間に亙って、通常号四四五冊、増刊号八六冊、通巻五三一冊（休刊は関東大震災時に一回。大正二年九月号が平出修の小説『逆徒』により発売禁止）を数える総合雑誌で、これまでも指摘されているとおり、特に明治期における思想・文化の動向を観察する上で欠くことのできないメディアである。

博文館は明治二十（一八八七）年六月、既成の言論を採録、ダイジェストする雑誌『日本大家論集』の刊行をもって創業を開始し、その年のうちに『日本之教学』『日本之女子』『日本之商人』と四誌を創刊、二十一年には『日本之殖産』、『日本之法律』『日本之時事』（月二回発行）『日本之兵事』『日本之警察』『やまと錦』の六誌、二十二年には『日本之少年』（月二回発行）『江戸會誌』『国会』など刊行雑誌の種類を増やすことで成長を遂げた。が、二十三年一月を期して『日本之教学』を『日本大家論集』に、また『日本之警察』を『日本之法律』に吸収、『日本之女子』『やまと錦』を合併して『日本之文華』とし、『日本之殖産』『日本之時事』『日本之商人』『国会』の四誌を合併して『富国』に統合した。しかし、その年のうちに『日本商業雑誌』と『婦女子』（すぐに『婦女雑誌』に改題）を創刊するなど、雑誌の統廃合と創刊を読者の動向を睨みながら繰り返していた。が、明治二十八年八月より刊行した『日清戦争実記』（全三号）が大当たりし、その元手によって、『日清戦争実記』を除いて従来からの雑誌を一切廃刊し、『日本大家論集』『日本商業雑誌』『日本農業雑誌』『日本之法律』『婦女雑誌』の五誌を統合、文字通りの総合雑誌として『太陽』を創刊した。

ほぼ同時に『日本之少年』『幼年雑誌』

『学生筆戦場』の三誌を『少年世界』に、『明治文庫』『春夏秋冬』『世界文庫』『逸話文庫』『文芸共進会』の五誌を『文芸倶楽部』[1]に総合、『太陽』とあわせて都合三誌に統合、雑誌の編集販売戦略を拡散型から集中型へ切り替えた。この成功をもって、文字通り明治出版界の雄を誇ることになる。『太陽』創刊号は明治二十七年十二月二十八日に逓信省認可を受け、二十八年一月五日づけの刊行。四六倍判、和文二〇四ページ、英文一二ページ。日本ではじめての大型、大冊雑誌で、口絵に現内閣肖像写真など十枚、木口木版「戦捷の元旦」を掲げ、途中に全ページ大の写真彫刻銅版や銅版写真をあしらうなど、ヴィジュアル面にも新機軸を出して、定価一五銭という廉価をもって売り出された[2]。

記事内容も、学術全般から文芸一般、家庭婦人向けの記事までを網羅的に掲載し、英文の総合記事をつけ、旧来の小冊子型、結社機関誌型の雑誌の形態を一新、世間の耳目を集め、また販路の拡張を工夫して雑誌の販売部数を一挙に増大させた。

発行部数については、初版は二十八年二月五日刊行の第二号表紙脇には、創刊号は〈六版二十八万五千部〉という活字が躍り、第三号表紙脇には〈第一号八版第二号六版〉を重ねたとある。他にも、第二巻二五号広告欄に〈二拾余万の愛読者諸君〉などの語句が見え、第五巻二六号広告欄では、やや落ちて〈十数万部、優々東洋第一の大雑誌〉という言葉が見える。

鈴木正節「博文館『太陽』の研究」[3]（以下、鈴木正節論文と略称する）は、これらの数字は〈もとより宣伝用の誇張が多分にあるだろう〉としているし、また永嶺重敏「明治期『太陽』の受容構造」[4]（以下、永嶺重敏論文と略称する）は第二号表紙の数字の信憑性を薄いとし、〈比較的信頼し得る『警視庁統計書』の数字〉として創刊年の総発行部数一、一八二、四四八、一号平均九八、五三七という数字をあげ、それでも〈当時の政治評論雑誌の発行部数は数千部であったから、十万部に達する大冊『太陽』の登場は小冊子的雑誌界にとって文字通りガリバー的雑誌の出現を意味した〉と述べている。

『太陽』に記載された発行部数について、これらの見解は誇大宣伝としてとらえられているが、『警視庁統計書』は届出の数字であり、この時期における届出の数字と広告の数字の関係は『国民之友』が一時期、実際の数字を数倍する誇大宣伝を行ったことが知られているが、税金対策など経営上の実態が明確にならない限り、広告の数字が誇大としても、どの程度のものであったかは判断しきれない[5]。

この『太陽』の創刊には館主、大橋佐平、長男、新太郎らが明治二十六（一八九三）年、シカゴ世界博覧会を機会に北米と西ヨーロッパの出版界を見学してまわった経験が生かされていることも、これまで指摘されてきたとおりである。

その経験とは、第一に欧米の最新技術の導入。一例は『日清戦争実記』への小川一真による写真銅版の採用となり、出征将校

や戦死者の肖像写真を掲載して、この雑誌の成功の大きな要因となった。またロンドンではロイターと契約して、翌年、系列会社として内外通信社を創業する基礎ともなった。『太陽』にも、小川一真による写真銅版とロイター電の記事が盛り込まれた。

第二に『太陽』編集上の基本コンセプト。大橋佐平は〈彼邦に譲らざるべき大雑誌を発行せん〉という決意を持ち帰ったが、それは『コンテンポラリー・レヴュ』『エジンバラ・レヴュ』『ハーバード・マンスリー』『ノースアメリカン・レヴュ』『スペクテートル』『フィガロ』『エコー』『コスモポリタン』『レヴュ・オブ・レヴュ』らの雑誌を閲覧して、これらの雑誌が〈偉大ナル勢力ヲ社会ニ有スル〉ことを目の当たりにしてのことだった。明治二十七年末にそれぞれの廃刊を告げた博文館刊行の各雑誌には、色ページで『太陽』創刊を予告する宣伝文を挟み込んであるが、そこにこれらの雑誌名があげられている。

一八九〇年ごろから、西ヨーロッパや、とくにアメリカ合衆国では、いわゆる大衆社会化現象の進行に伴い、主要な総合月刊誌が、一般的な関心に対応する誌面づくりに励み、ポピュラー小説を掲載、写真やイラストレイションをふんだんに盛り込み、同時に競争の激化から廉価になり、巨大な国民的商品になりつつあった。

鹿野政直「『太陽』―主として明治期における―」[6]（以下鹿野政直論文と略称する）が、雑誌『太陽』の基本性格として、まず、〈商品であることを至上の課題とした〉と指摘している。これが徳富蘇峰の主導する『国民之友』などの結社機関誌とは性格を分ける根本であることに間違いはない。しかし、「商品としての雑誌」は『日本大家論集』創刊以来の博文館の雑誌の編集方針にほかならない。より精確にいうなら、『太陽』の〈商品〉としての性格は、各層、各分野それぞれに対する商品ではなく、新たに形成されつつある国民全体の文化的要求を総合的にとらえてこれに応える新たな商品というものとすべきであろう。この新しい商品の性格を、大橋佐平は外遊経験から学んだのである。

しかし、国民全体の文化的要求を総合的にとらえてこれに応える新たな商品という意味では、アメリカやイギリス、フランスの主要な総合雑誌と同じであっても、『太陽』は、それらといささか性格を異にしている。

『太陽』はまず、各分野のオピニオン・リーダー的な執筆者を登用し、国民世論形成の「公器」となりうる廉価な総合雑誌という戦略を明確に打ち出された。これによって既成の言論雑誌と比較するなら、思想的な特徴の見いだしにくいといわれるような、総花的で、通俗的な巨大雑誌という性格が形成されたのである。

総花的とは論説、史伝、地理（紀行、観光案内）、小説、雑録（歴史知識、随筆、評論など）、文苑（漢詩、和歌、俳諧など）、芸苑（能楽、相撲、生け花、茶道など）、家庭の各欄と、政治、法律、文学、科学、美術、商業、農業、工業、社会、海外思想

や世論一般など動向紹介欄、社交案内や内外彙報欄、それに英文記事という多彩さを指してのことである。

永嶺重敏論文は『太陽』の基本的な性格として、『国民之友』と『中央公論』の間に置いた場合の〈思想的個性〉の弱さを指摘し、逆に、記事内容の〈百科総覧的膨大さ〉をあげ、それによって〈全国に漸く形成されてきた近代的な知識人中産層〉の文化的要求に応えうるものとして形成されたと論じている。読者層を詳しく分析しての見解である。

しかし、永嶺重敏論文も指摘しているように、『太陽』創刊時の日本では、いわば国民一般の享受しうる文章スタイルはまだ形成されていなかった。さらには、この時代は政治・経済における「立身出世」のスローガンによって明治期に開かれた知的な階層移動の可能性が、男子の中学進学率の急勾配の増加傾向に示されるように広範囲に定着しつつある時代であり、いわば国民の一般的教養水準の形成期にあたっているとみなすことができる。

そこで『太陽』の編集方針の内容は、アメリカの総合雑誌のように国民一般ないしは知的中間層の興味を想定して編集することとも若干異なる。いわゆる総花主義は、『国民之友』など論説主体の雑誌から見れば、はるかに通俗的に映るのはたしかだが、『太陽』は全体として民衆の嗜好への迎合路線をとったわけではない。

『太陽』は、漢文訓読体が圧倒的多数を占める論説欄にはパラルビ、和文脈ないしは口語文体に近い小説、あるいは、かなりくだいた漢文訓読体による家庭欄記事などは総ルビにしている。こうした編集上の工夫は、すべての記事をすべての読者に提供する姿勢ではなく、それぞれの読者が自分の関心や興味、また知的能力にあわせて記事を選ぶことができるような誌面構成を心掛けた基本戦略を示すものと考えてよいだろう。

一家に一冊、常備し、家族構成員の誰でもが、あるいは商家などにおいても、使用人を含めて誰でもが、どれかの記事に関心をもって読める、あるいは識字層が他に対して読み聞かせができるような装置として考案されたと判断されるし、かつそのように享受されたと想像される。

つまり、編集上の基本戦略は、各欄にそれぞれの享受層を想定することであった。既刊の各種雑誌統合という経営戦略と、各層の読者が享受しうる雑誌の創出という新メディアの開拓の方針の採択は、表裏する関係においてとらえられる。総花主義的な編集方針は、この経営戦略と文化状況の嚙みあわせによって生まれた。それを貫くのは、国民の「公器」、あるいは国民の教養を養うための雑誌という基本戦略である。

これは創業十五周年臨時増刊号「発刊の辞」に大橋新太郎が、〈国民知識の供給者たらむことを期す〉と述べていることにもうかがわれよう。この姿勢の、いわば結果として〈全国各地に漸く形成されてきた近代的な知識人中産層〉の平均的な文化的要求とよく合致したものとなったわけである。

そして、編集方針上で重要なのは、『太陽』は通常号においては、『国民之友』のように文体の統一を行わず、文体や句読点などの記号類に関しても、各執筆者の裁量にまかせている点である。個人のスタイルの尊重の姿勢と言い換えることもできる。これもまた『太陽』という雑誌のまとまりのなさを一層印象づけることになっている。

なお、英文記事の掲載は、明治初年代に次ぐ、明治二十年前後の二度目の「英語熱」の時代のあとを受けて、ひろく存在した英語学習の要求に応えるとともに、初期の『太陽』が海外市場を誇る姿勢をもっていたこととも密接に関係しよう。〈海の内外に三十万の読者を有する我『太陽』〉（第三巻二五号、広告欄）という言葉にそれは端的に示されている。実際、どの程度の部数が海外に出ていたか明らかではないが、外交官や商社マン、移民などを通じて、海外の読者の目にふれることまでをも期待していたと想像される。[7]

英文欄の筆者は神田乃武。九年近くアメリカ、フィラデルフィアに留学し、二十二歳で帰国したとき、〈日本語をまず完全に忘れてしまっていた〉「英語名人」[8]を起用している。

それにしても、いくら新技術の導入をはかり、国民各階層の欲求に応えうるような「公器」としての雑誌づくりを計画したとしても、土台がないところに実現しうるものではない。「公器」ゆえの総花主義という基本戦略を可能にしたのは、博文館が、すでに各種雑誌及び書籍、教科書などの出版を通じて各界の主要人物と連絡をつけていた実績があったからである。

その執筆の陣容だが、創刊号の目次から主な執筆者を拾ってみると、「論説」欄に、久米邦武、千頭清臣（教育）、井上哲次郎、坪内雄蔵、三宅雄次郎、上田万年、坪井正五郎（理学）、井上辰九郎（法学）、横井時敬（農学）、尾崎行雄、中西牛郎（国際政治）、「史伝」欄に、森田思軒、戸川残花、福地桜痴、「小説」欄に、尾崎紅葉、饗庭篁村、「雑録」欄に、依田百川、幸田露伴、志賀重昂、石橋忍月、石川鴻斎（漢詩）、長詩に佐佐木信綱、「芸苑」欄に大和田建樹、「家庭」欄に三島通良らの名前が拾える。（詳しくは、本小特集付録の『太陽』第一巻執筆者一覧を参照されたい）

鈴木正節論文は、『太陽』初期の執筆陣の概要を、五つのグループに分けている。第一は館員（記者）ないしは元館員、第二は硯友社グループ、第三は東京専門学校（早稲田大学）グループ、第四は『帝国文学』グループ、第五はその他著名人。この分類は初期の執筆者の付置を分析するのに大変便利だが、たとえば第四の『帝国文学』グループは、大橋乙羽と同郷だった高山樗牛が、明治二十八年夏ころから盛んに執筆し、客員となってからのことであり、当初より、こうしたグループのシフトが目論まれていたとはいえないだろう。つまり、この陣容は徐々に形成されていったものである点に留意すべきだ。

鹿野政直論文は、これを〈民友社派、政教社派、硯友社派、文学界派を一堂に会せ

しめた壮観ぶり〉[9]と形容している。ここに国民世論のための「公器」をつくりたいという方針がよく現れていよう。

加えて創刊号巻頭論文に久米邦武をすえているのは、雑誌として、いわば在野の精神を示しているといえるかもしれない。なぜなら、久米邦武は明治二十四年末、『史学雑誌』に連載した「神道は祭天の古俗」が神道家の攻撃を受けて退官、いわば浪人中の身である。

また、上田万年「国語研究に就て」は四年間のドイツ留学を終え、東京帝大に就任し、学界に新風を吹き込む意気込みに燃えた帰国まもなくの講演録（著者が自身で文章に手を入れている）であり、ここには編集部が学界の新しい動きに敏感に反応しているのがうかがえる。また、小説欄にいわゆる根岸派の重鎮である饗庭篁村と、硯友社の尾崎紅葉（実際は泉鏡花の執筆）を並び立てる配慮も見せている。そして、漢詩欄には乃木希典の名前も見えるし、「日清戦争」中に伊藤博文邸で催された漢詩の会からの収録もある。

執筆陣から見ても『太陽』は、ジャーナリズムの立場から、文字どおり国民世論形成の「公器」としての雑誌を目指し、そしてそれは、かなりの程度、誌面に実現されたといってよいだろう。

## 2。「日清戦争」と『太陽』

『太陽』は、明治二十七年夏に火ぶたを切った「日清戦争」が、半島と大陸の戦場における日本側の勝利が確定し、日本列島に戦勝気分が横溢する時期に創刊された。それは口絵の木口木版「戦捷の元旦」によく反映されている。

創刊号論説欄の記事は、ほぼこの戦勝気分に対応するものになっているが、しかし、その姿勢は、筆者によって様ざまであり、ひとつの論調を形成しているとは言い難い。『太陽』の論説記事は、むしろ、どのような範囲で、どのように多様な思想的対応が論壇人の中にあったか、について観察するときに有効性をもっているといえよう。次にその一端を見てみることにする。

『太陽』創刊号巻頭、久米邦武「学界の大革新」は、〈泰東文明の現地たる清国は、無名の師を起こしてあへなく滅びんとす、学者社会は如何なる感情を以て見聞するにや〉とはじまる。そして〈合戦をのみ暁々といひはやすは俗人の事なり、学界より見れば、是兵学てふ殺人器械の運用を講究する一科学の事のみ〉と戦勝気分を俗事と見なして学界の高みに立ち、そしていう。〈社会の発達に従ふて、分業専科の岐はいよ〳〵繁くなりぬれば、各業各科を修めたる面々は、今にも泰東の将来に種々の望みをかけて、其用意をなすこと肝要なるべし〉と。

ここには日本対清国の軍事的対立の事態に対して、「泰西文明」に対する「泰東文明」という観念の配置からこれを論じ、さらに〈支那といえば犬打童まで野蛮の国と嫌〉う風潮に対して、〈学理は国の興廃に関するものに非ず〉と、軽率な「支那蔑視」に水を差す姿勢が明白である。

〈我軍は方に勝に乗れば、人々みな思へり、日本は清浄の国なり、廉潔の民なり、愛国の心厚く、義侠に富み、武勇にして物の情れを知るなどと、かゝる自称の誉詞は慢心の発露にて、学界には排除せられたり〉。

戦争を低くは見ても非難の声を高くあげるわけではなく、戦勝の形勢が明らかな時点で「戦後」を展望する視角をとっているとはいえ、〈慢心の発露〉を戒める警世的な文章と知れる。

そして久米邦武は〈今度の清韓の事実〉こそ、〈学界に革新の洶濤を起すべし〉という。〈日清韓の三国は、是まで発達の歴史に大差なし〉といい、〈日本も明治以前の政治にて革新をなさぬならば、今日の連勝は得まじといはゞ、諸人の推諒を促すに足るべし〉と述べる。

〈泰西〉より吹き来る〈革新の風〉に、真っ先に衝撃を受けたのが日本であり、〈泰東革新〉の機運が原因となって、日清の開戦となったというのが、久米の「日清戦争」観であり、基本にあるのは、「革新」対「保守」の図式である。この「革新」の中心概念は〈分業専修〉ないしは〈分業専科〉におかれている。「日清戦争」の帰趨も、軍隊の〈分業専科〉の有無に求められる。

この〈分業専科〉制の対立概念は〈階級制〉である。〈抑人の身体は他より傷害を受けるべからず、苦労の所得は他より掠奪さるゝべからず、政府を設くるは其生命を保護し財産を保せんがためなりとの理は、必ずしも基督教の習俗より出たる習慣にあらず、天地の正義なり〉。これが久米の主張の根幹にある。〈貴賤上下の男女みな生存競争の忙劇場に投入され〉る社会の変化ゆえのこと、道徳政治から〈民権平等〉の法律政治の世への転換を説く。〈徳治の時代の社会は家長政治の結晶体〉とし、それに対して、立憲政治の時代とは、〈階級を撤去〉し、私有財産制による個人主義を確立し、分業専科による発達を力説する。

しかし、〈古来の明哲〉の〈不滅の金言〉は、〈時運に応じて変通し明解を与ふれば、光輝を発する真理を存ずべし〉と論じて結ぶ。これは、支那蔑視への風潮の警句ではじめた文章の結びを整えるためのものである。

久米邦武の主張は、「日清戦争」による〈清国没洛〉を〈道徳政治〉と〈階級制〉による旧弊な社会の命運と見なし、日本の勝利を、法治政治と私有財産制による個人主義の確立、それによる分業専科への転換の象徴と見なして、それこそが〈泰東革新〉の要と説くことにあった。ここには私有財産制度に基づく個人主義と経済活動の競争の自由、それを保障する法治国家の理念が明確である。

それはキリスト教的な天賦人権論、あるいはその変形としての福沢諭吉『学問ノススメ』（一八七二）の〈天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず〉ではなく、天賦人権論に対して、明治十年代から二十年代にかけて加藤弘之らが論陣を張ったハーバート・スペンサー流の社会進化論に支えられた近代的人権思想の延長にある

といってよいだろう。

その意味で、久米邦武「学界の大革新」はスペンサー流の社会進化論の歴史的な証明を「日清戦争」に求めるものであった。この主張が〈大革新〉であるゆえんは、明治十二年の「教育令」に発して、明治十四年政変以降の国民教育の柱に中国の「古学」、すなわち「四書五経」（といっても革命の思想を説く『孟子』は外されていたが）を据える教育政策がとられたことに対するものだからである。

欧化政策を勧める福沢諭吉は『時事新報』紙上で、この教育政策を何度か排撃している（たとえば明治二十五年十一月三十日「教育の方針変化の結果」など）が、久米邦武のこの主張も、近代化主義の立場から儒教道徳による国民教化政策への批判の意味をもっている。

ただし、文章を閉じるにあたって、ややつけたり的であるとはいえ、〈古来の明哲〉の〈不滅の金言〉に言及しているところに〈泰東文明〉の学問伝統を尊重する姿勢は明らかで、この点、「兵馬の戦に勝つ者は亦商売の戦に勝つ可し」（明治二十八年一月八日）などで〈一切の文明の利器を用ゐ〉ない中国人を〈評して野蛮人の迂闊と伝ふも過言にあらざる可し〉と蔑視の姿勢を隠さなかった福沢諭吉とは、その姿勢を異にしている。

また、久米邦武は〈父子兄弟叔姪みな我長する材質によりて智能を伸ぶべきに、其伸達する資本をば、道徳の制裁とて尊属の家長に委すならば、国民の事業は障礙せられん〉と言い切っている。

久米邦武は第二号で「階級制と君子の道」を書き、第四号の京都遷都一一〇〇年に際して「京都は国美の庫なるを論ず」を挟んで、第五号、第六号と「倫理の改良」を書いている。「階級制と君子の道」は、〈階級制〉の廃絶を説いて、〈今存留したる華族士族平民の族制〉も〈虚影〉にすぎないとし、その弊害を説く。〈帝室の臣下〉としての平等、利害競争の平等の実現を説くもので、これが徹底すると加藤弘之の主張のように天皇制への疑問に発展しかねない内容をはらんでいるが、後半は話題を学問に転じ、〈東洋本来の学は貴族の教へ〉であり、〈生存競争の刺激を受けぬ〉もので、〈概して推究の力に乏し〉とし、〈有禄の家、即君子の位置にありたるもの〉も、〈先づ君子を脱して、生存競争の中にある智徳材能を推闡することを、熱心に研究〉すべきであると結論する。

「倫理の改良」の「改良」は、旧来のものを西欧近代的な理念をテコにしてつくり直すことを意味する明治期の「改良」の語の用法の範疇にあり、儒教道徳をスペンサー的な進化と平等思想によって組み替えようと苦心するもの。

「階級制と君子の道」も「倫理の改良」も、創刊号巻頭論文を敷延するもので、利益競争の平等な社会という観念を中心にしている。

これは、同じ近代化主義の範疇にあっても、国際的な経済競争の観点から富豪の健全なる育成を説き、夫婦兄弟間の「徳」を

尊重し、男尊女卑を戒めても、家長の権限などに関しては、社会の変化に伴って新しい「徳」が生ずるまでは、古い「徳」もないよりはまし、という態度をとった福沢諭吉の思想とは一線を画するものとなっている。

『太陽』創刊号の記事に戻ると、二番目の千頭清臣「戦勝後の教育」は、貿易立国の立場から「海事教育」「武事教育」「商事教育」の必要性を説き、加えて「語学教育」として、英、露、仏語の必要に加えて、〈特に朝鮮語、支那語の教育を隆興せしめんことを期せざるべからず〉と述べている。

それに対して、井上哲次郎「戦争後の学術」は、〈朝鮮は始より独立国となすといふ我国の趣意でありますからして或は之を我国の領地となすといふ様な事は無いであらうかと思はれますが夫にしました所が行末、ナカ〳〵我国の干渉を待たなければ到底独立して進歩の途に就くといふ様な事は覚束ないところでありませう、して見れば何処までも日本の教育を朝鮮に及ぼし日本語を以てあらゆる学術を教育する様になるであらうといふ事は殆ど疑の無い事であります〉と、朝鮮独立助力論の立場から、いわば文化的な侵略を平然と説いている。この点で、日本人の朝鮮語学習の必要を説く千頭清臣とは対立を見せ、当時の朝鮮独立助力論も様ざまな内容をもっていたことが知れる。

なお、『太陽』では、朝鮮独立助力論を主流にして、「日清戦争」後の朝鮮半島をいかにすべきかの論議は延々と続く。

この井上哲次郎の論の要旨は、〈日本の学術となつて居るものは支那思想と印度思想と西洋思想の此三者〉であることを言い、〈外国に起つた所の学術を引き入れて夫れを学習する事に止まるのは如何にも浅薄である、我より学術を講出するといふことがなくては其国に学術の本源が無い様になる〉といい、戦勝を機に〈東西の思想を咀嚼して其結果として我に固有なる一種の学術思想を養成〉すべしというもの。〈支那古代の哲学、文学等の日本人に取つて有益なる事は支那に打ち勝つたる後も少しも変はるべき事はない〉と言い、〈支那思想と印度思想〉に〈甚だ高尚なる元素がある〉ことを認めてのことである。外来の学術を受け入れてきた「伝統」を重視する近代ナショナリズムといえよう。

坪内逍遥「戦争と文学」は、国家的戦争の効用を国民の団結、自尊心の高揚に認め、精神的向上につながると論じるもので、次号に後半が掲載され、そこでは西洋における戦争文学の歴史を振り返っている。

これは「日清戦争」の勝利が明治期知識人にもたらした近代国民国家主義（ステイト・ナショナリズム）の高揚を見事に示す例といえよう。

三宅雪嶺「漢字の利害」は〈僧を憎みて袈裟に及ぶ、勢の当に然かるべき所なり、況んや袈裟亦憎むべきものに於いてをや〉とはじめて、〈東洋の覇権を握らん〉とする状況において、東洋の知識を〈利用せざるべし〉という立場から、漢字廃止論に反対する。制限漢字論にも反対し、漢字の有

益を説いて、むしろ漢字の音の変化に通じるような教育を勧めている。「日清戦争」に乗じて、ふたたび漢字廃止論が頭をもたげることへの警戒の言の一種であろう。

この点、上田万年「国語研究に就て」とは、真っ向から対立する点がある。「国語研究に就て」はドイツで汎言学（一般言語学、比較言語学）を学んで帰った成果により、国語学を確立しようとする姿勢に貫かれた講演で、第一に国語の地位向上、第二に近代語の研究と比較研究の必要性、第三に国語学を美文学（今日いわゆる文学）から独立させることの必要性を述べる。第一の国語の地位向上は、近代ステイト・ナショナリズムによる国語学の主張で、〈現に今でも、漢語でなければ、詔勅も出ず、論説もかけず〉と和文尊重の立場を打ち出す。

漢文訓読体は明治期に主流となった文体で、その「漢語」も三宅雪嶺「漢字の利害」の説くとおり、〈多少の訛化〉を経て〈我国語に入るべき者、其数甚だ多し〉という現状認識の方が当たっている。〈詔勅も、漢語〉と決めつけるのは、「日清戦争」の戦勝気分の乗じた言語ナショナリズムのアジテイションと評してもまちがいではなかろう。

坪井正五郎「事物変遷の研究に対する人類学的方法」は、創刊号論説中、「日清戦争」への対応の言のないもので、衣服変化の歴史的変遷を各地の民族を調査して知る人類学的方法を解説したもの。

井上辰九郎「経済的闘争」は、世界各国の輸出入比較の統計を示して、各国の経済闘争の状態を述べ、その闘争の重要性を訴えるもので、以降、『太陽』の論説が好んで統計を取り上げ、数字を並べる傾向の一端を示している。

横井時敬「農業教育に就きて」は、坪井正五郎の論説と並んで、戦争への言及がないもので、北海道農学校などにおけるアメリカ式疎放農法の導入の失敗を批判し、かつ農業教育の無用論を退けて、農業と農業教育の沿革を反省することを訴えるもの。

尾崎行雄「対清政策」は、日支同盟説、欧州諸国との共同扶翼説、独力扶翼説、欧州諸国との共同分割説、日本の独力併領説、売恩待斃説、の六つの政策を順次検討して日本の独力併領説だけが取り得る政策と断じる。すでにして帝国主義的な野望を剝き出しにした論調。

尾崎行雄の論説は、第十二号「軍備と外交」などまで一貫して『太陽』論説中にあっては過激なもので、同じ第十二号で倍する長さで外交政策を展開している川崎三郎の「東邦革新」が、たとえば日英同盟と日露同盟のどちらが得策かと冷静な態度で考察しているのに比べると、それがよくわかる。

中西牛郎「日本帝国の任務」は、戦勝気分をそのまま活字にしたような論調のうちにも、戦争には勝ったが、国民としては勝利していないと言い、〈世界列国の進歩と平和〉に対する任務を訴えるもので、これが論説欄の最後を飾っている。

このように『太陽』創刊号論説記事は、おおむね「日清戦争」の勝利という時局に

対応し、戦勝気運をとらえて、そこに進歩発展史観の証明を見いだしたり、近代的ステイト・ナショナリズムを鼓吹する記事と、軍事的勝利と文化的発達は別物と戦勝気分に警句を投げかける記事が入り交じり、また、「日清戦争」後の外交の進路を説く記事においても、朝鮮独立助力論を主流にしながらも、その助力の仕方の内容をめぐって、今日の言葉でいうなら文化侵略に相当する政策論議をもふくんでいるし、また、対中国政策に関しても、帝国主義的野望を剝き出しにする記事など様ざまであった。

第二号以降ほぼ一年間を通して、国内政策として戦後の増税問題をめぐる論議が新たに加わってくるほかは、「日清戦争」勝利の意義を説く記事、戦勝気分に警告を投げる論説、戦後政策をめぐるものと、論議の多様な方向は変わらない。

## 3。『太陽』論説欄の思潮について

創刊期『太陽』の論説欄は、「日清戦争」をめぐってオピニオン・リーダー的な知識人の多様な反応を示しているとはいっても、そこには自らひとつの傾向ないしは特徴が浮かびあがってくる。

西欧的な法治国家と自由競争社会の育成という立場を、創刊期の『太陽』誌上で代表する久米邦武の論説は、その原理をふりかざし、また、東洋文化の伝統を革新するという立場をとっていた。同じような思想の範疇に属するとはいえ、これを福沢諭吉のそれと比べるならば、福沢の「脱亜入欧」のスローガンが中国の文化習慣への蔑視を伴うものであり、久米の伝統を踏まえた東洋革新の思想とは異なるものであることが明確になるし、「徳」、すなわち社会秩序の維持をめぐっては福沢の方が、より現状に即して全体としては、旧来の「徳」もないよりはあった方がましという態度を取り、論議を一夫一婦制の問題に限っている姿勢をとっていることなど明らかになってくる。

なお、『太陽』第二巻第十六号（八月五日発行）から、数年にわたって加藤弘之が「貧叟百話」を連載するが、これはその題名のつけ方が如実に語っているように、「時事新報」連載の福沢諭吉「福翁百話」を意識したものである。

ただし、館主、大橋佐平は、博文館が福沢諭吉が慶応義塾出版社や時事新報社など自身と関係する版元以外から本を出版した唯一の出版社であることを誇りにしており（『大橋佐平翁伝』）、博文館が福沢諭吉の思想を排撃したり、排除したりする姿勢をもっていたわけではない。

より大局的に見るなら、第一に、鹿野政直論文が、創刊期『太陽』の基本姿勢として指摘している立憲主義[10]は、博文館全体の思想として確認することができる。博文館は明治二十三（一八九〇）年、帝国議会開会の年に、〈政治、経済、法律の必要なるべきを察し〉（『博文館五十年史』、四七ページ）、『政治学、経済学、法律学講習全集』全二十四冊の啓蒙書を出版しているが、これらの書物の底にも、その思想は流れている。

第二にやはり明治二十三年、「日本文学全書」「日本歌学全書」を刊行開始している。この二つのシリーズが日本で初めての「日本文学全集」にあたるもの。「日本文学全書」は『竹取物語』『土佐日記』『紫式部日記』などを収めた第一巻にはじまり、『源氏物語』やいわゆる中世説話文学など散文作品を刊行したが、〈当初は十二冊にて完結する予定が、非常の好評で是が国粋保存思想の勃興と相俟て、一篇出る毎に盛んに版を重ねる故、更に「続日本文学全書」十二編を増刊し、二十四冊で完結〉したと、『博文館五十年史』（四八ページ）にはある。『博文館五十年史』は時局の趨勢に適切な出版をなしたということを強調するあまり、その叙述に疑問を感じる箇所もまま見受けるが、この国会開設を前後する時期の〈国粋保存思想の勃興〉は、そのとおりに受け取ってよい。そして、明らかに博文館は「国粋保存思想」に棹さす姿勢を見せており、それが『太陽』にも流れこんでいることは、三宅雪嶺が創刊号から筆を取り、明治二十九（一八九六）年に政治欄巻頭論文を執筆するなど、大いに活躍することにも現れている。

この「国粋保存主義」は、福沢諭吉の欧化的近代化主義とは真っ向から対立するものである。そして「国粋保存主義」の内容は、「国粋」とはいっても、近代西欧的な国民国家主義とは異なり、東洋の文化伝統を尊重する傾向を多分にもっていたことは、「太陽」創刊号記事の論調にもよく現れている。

博文館における、この「国粋保存主義」の流れは明治二十四（一八九一）年、「温故叢書」「日本文庫」の刊行につながってゆくが、第三の傾向として、明治二十五（一八九二）年にはじまる「四書五経」や「諸子百家」の注釈本である「支那文学全書」刊行を指摘しておかなければならないだろう。『博文館五十年史』はこれを〈当時国文学の気勢稍々衰へ、漢文学が漸く頭を擡げてきたので〉としているが、明治期における「漢文学」の隆盛は、少なくとも明治十年代後半よりと判断されているので、この時勢の判断には留保をつけておくが、しかし、ここに「古学」を捨て去らない態度は明らかである。

こうした博文館の出版の方針と比べてみるなら、漢文訓読体の廃止による「国語」の育成を訴える上田万年の主張は、西欧的近代国民国家の思想に基づく国語の思想であることが明確になろう。東洋文化の伝統を重視して、むしろ漢字の音の変遷の教育に力を注ぐべきという三宅雪嶺の主張は、これと真っ向から対立し、むしろ博文館の出版方針と合致するものであった。また、戦勝を機に〈東西の思想を咀嚼して其結果として我に固有なる一種の学術思想を養成〉すべしという井上哲次郎の方針も、これと抵触しない。

こうした東洋の文化伝統を尊重する傾向、ないしは東洋と西洋の思想の折衷主義的思想が、戦勝気分に浮かれ、「支那蔑視」の風潮に走る世の中に対する警世の句となって現れていたのである。

のちの日露戦争とは異なり、「日清戦争」においては、秘密外交のうちに突然開始され、突然中国本土に攻め入り、軍事的優位を決めてしまった戦争の性格もあって、ほとんど反戦論、非戦論が出なかった。そうした時局を考えると、創刊期『太陽』誌上に「支那蔑視」の風潮に警戒を見せる論調がかなり見えることは、東洋の伝統を重視する側の知識人が良識を保とうとする姿勢として評価されてよいだろう。

もちろん、それらも近代的な国民国家育成の進路をめぐるものであり、西欧近代的な方針をとるか、東洋文化の伝統主義をとるか、あるいは折衷主義をとるかの路線上の対立が『太陽』誌上に反映しているのである。

そして、『太陽』創刊期におけるこれら東洋文化の伝統を重視する思想は、岡倉天心がやがて説くようにアジアにおける宗教や生活風習の根源を同一と見る「亜細亜は一」の思想を最も極端なかたちとしてふくんでいると考えてよい。

わかりやすい見取り図を示すならば、福沢諭吉的な「脱亜入欧」思想と岡倉天心的な「亜細亜は一」を両極において、明治二十年代から明治三十年代前半の思想を眺めるとき、『太陽』の記事は、福沢の執筆はないものの、たとえば上田万年の記事に見られるようないわば純粋な近代西欧型のナショナリズムが見られるように、その両極をふくんだ様ざまな思想の坩堝のように映る。

そしてそれは〈我が太陽は本来不偏不党〉（二巻一号）などに見られる謳い文句に現れた博文館の出版方針、編集方針の反映だったのである。

創刊期に、東洋的伝統を重視する傾きをもった思想が多く見うけられるのは、明治二十年代の国粋保存主義の擡頭をいわば正確に反映しているといえるだろう。博文館がこれに便乗して資本を強化したことは、博文館という出版社自体が、時局の文化的な動向を映す鏡のような性格をもとうとし、またかなりそれを実現していたことの証左である。

## 注

（1）『文芸倶楽部』の発行は一月二十五日。同じ明治二十八年一月創刊号といっても実際には二十日の開きがあった。そして、この国民のための「公器」を想定するがゆえの総花主義は、やがて日露戦争後に進行する、いわゆる大正教養主義的な読者層の形成と、より大衆的な読者層の形成とのふたつの動きのどちらにも、対応しえずに力を失ってゆく原因になったと考えてよい。

（2）それ以前の言論雑誌を代表する『国民之友』は、四六判五〇ページ前後、六〇銭。発行部数は徳富蘇峰の回想などからすると、よく売れた時期で二万部、二十八年一月前後では七千部と推定されている。

（3）鈴木正節「博文館『太陽』の研究」（一九七九、アジア経済研究所）

（4）永嶺重敏「明治期『太陽』の受容構造」、『出版研究』二一号（一九九一、三、講談社）

（5）鹿野政直「『太陽』―主として明治期

における―」も、発行部数は〈正確にはわからない〉とし、広告欄の数字を〈誇大にすぎる〉としている。

(6) 鹿野政直「『太陽』―主として明治期における―」(一九六一、『思想』十二月、四五〇号)

(7) 英文欄は、明治二十九年の第二巻で廃止、「CONTENTS」のみ英文となり、明治三十三年第六巻より要目梗概「SUMMARY」として英文がつくようになるが、明治三十七年の第十巻より「THE SUN TRADE JOURNAL」として拡大。

(8) 太田雄三『英語と日本人』(一九八一)、講談社学術文庫版(一九九五)、一三三頁

(9) 注(6)に同じ、一三五頁

(10) 注(6)に同じ、一三六頁